

学力向上をめざす「頑張 Ring Active Learners」の育成

—— 教科横断的な学びを通して ——

大阪府域公開授業・実践報告会レポート
／八尾市立成法中学校学力向上委員会

目次

1. 取組の背景	・・・	1
2. 理論的枠組み	・・・	2
3. 教科別の授業実践から見える子どもたちの学び	・・・	4
4. 成果と課題	・・・	7
5. 今後の展望	・・・	8
6. 結びにかえて	・・・	9
7. 参考文献	・・・	10

第1章 取組の背景

学力向上という言葉をお口にすると、私たちはつい「結果」を思い浮かべてしまう。しかし、学びは本来、数値では測れない呼吸のような営みだ。学習者が問題を解くその瞬間の迷い、友だちとの対話の中で見つけた発見、失敗をきっかけに生まれる再挑戦——それらすべてが「学力を育む時間」である。けれど現実の教室では、努力の質が点数という一瞬の指標に還元されてしまうことがある。その違和感を原点に、私たちは「学力とは何か」を問い直すことから始めた。

本校は、2024年度（令和6年度）、「スマートスクール実現モデル校」、2025年度（令和7年度）「情報活用能力をはぐくむモデル校」（大阪府スクールエンパワーメント事業）に指定された。ICT 環境の整備に加え、端末を“使う”こと自体を目的とせず、それらを活用して「どのように学ぶか」「何を共有し、どう変容するか」を問い続ける授業づくりに取り組んできた。

この取組の中核に据えたのが、すべての子どもたちの情報活用能力の育成である。ここで言う情報活用能力とは、単なる検索や発信のスキルではない。情報と向き合い、他者と関わりながら、自己を調整し、学びを深める力のことである。そしてそれは、「一人ひとりの自己実現の力」にも直結する力であると捉えている。

本校では基礎・基本の定着にばらつきがあり、思考・判断・表現に課題が見られた。ノートの記述量は十分でも、論理の筋道が曖昧なまま終わる学習が多かった。理解はしているはずなのに、それを他者に説明する言葉を持ってない。そんな姿が各教室に共通していた。原因は単純ではない。学習内容の難化、授業時間の圧縮、ICT 導入に伴う思考の断片化など、背景はさまざまだ。しかし根底にあるのは、学習者自身が「自分の学びを自覚的に動かす力」を十分に発揮できていないということだった。

そこで私たちは、校内のめざす生徒像を「頑張 Ring Active Learners」と定義した。主体的に目標を立て、仲間と協働し、挑戦し続け、学びを省察して次へとつなげる。一人ひとりが頑張りながら、学びを「リング（つながり）」のように結び合い、自分の成長を互いに支え合っていくという願いを込めている。

この方針は、前年に取り組んだ「スマートスクール実現モデル」の実践を土台としている。安全で公正な学びの環境をつくること、互いの違いを尊重しながら学ぶこと、情報の出典や責任を明確にすること。それらの積み重ねが、学習者の学びを支える信頼の基盤となった。この土台の上に次の挑戦を位置づけたのである。

また今年度の「情報活用能力をはぐくむモデル校」の実践・研究テーマとして「教科横断的にはぐくむ情報活用能力」を設定した。

学力の伸長は、単教科の努力では限界がある。学習者の思考は教科をまたいで広がり、表現は他教科の知識を呼び起こす。だからこそ、教科横断的なアプローチが必要だった。国語の言語的思考が理科の仮説検証を支え、社会の統計資料の読み取りが数学的推論とつながる。その相互作用の中に、学力の本質的な成長があると考えた。

第2章 理論的枠組み

本校の授業実践は、「個別最適な学び」「協働的な学び」「探究的な学び」の三つの価値を軸に、教科の枠を越えて展開されている。教科ごとの活動は多様だが、その底流には共通の学びの構造が存在する。すなわち「問いを立てる」「情報を集めて整理する」「考えを深めて表現する」「振り返って自己調整する」という循環的なプロセスである。

【授業デザイン】

授業のデザインにおいては、まず学習者自身が「問い」や「自分の目標」を発見する場面を意図的に設定している。導入段階で授業者は、学習者と単元全体の学び、本時の学習の流れや「単元で達成すべき教科としてのめあて」を共有し、学習計画を立てる。学習者の既有知識や関心に接続し、自発的な問い起こしを促す。問いが出発点となった後は、学校図書館資料やデジタル資料、インタビューなど複数の情報源を横断的に扱うハイブリッドな調べ学習を行い、情報の出所や信頼性を確認しながら比較・整理することを指導する。

整理した思考は、シンキングツールやスライド、Web ページ、口頭発表といった多様な手段で表現される。表現の選択肢を持たせることで、学びの個性化と協働的な学びの双方を成立させることを意図している。どの表現方法を選ぶかは学習者に委ねられるが、どの選択にも「出典の明示」や「発信の責任」といった情報倫理の要件を組み込んでいる点が本校の特徴である。

振り返りは学習の重要な仕上げである。学習計画表やルーブリックを用いて、学習の見通しと到達点を可視化し、学習者自らが自分の学びをメタ認知・調整する機会を設けている。これにより、単発の活動に終わらせることなく、学習者が主体的に次の行動を選べるよう支援している。

これらの授業デザインを支えるために、本校はステーション型支援や単元内自由進捗といった仕組みを導入している。ステーション型支援では、学校図書館での調べ学習、教室での協働討議、個別支援スペースなどを同時に機能させ、学習者が自分の学びに応じて場所と時間を選べる環境を整備した。単元内自由進捗は、とくに数学の領域で有効に機能しており、学習計画表やクエスチョンカードを通じて自分の進捗を把握し、仲間と教え合いながら学びを進めている。

また、授業づくりは教職員の個別の取り組みで終わらず、校内研修や授業公開、学校ホームページでの実践発信を通じてチームで行うことを重視している。学校図書館サポーターや ICT 支援員、ALT などの専門職と授業者が連携して授業をデザインすることで、教材選定・技術支援・学習支援が一体的に提供される体制を作り上げている。

これらの取り組みは、単に道具としての ICT を導入しただけでは得られない、「学びの文化」を校内に育てることをめざしている。タブレット等の機器は、情報を収集・整理・表現するための装置に過ぎないが、その使い方を通じて生徒が学び方を学び、他者と協働する態度を身につける場とすることが本校の根本的な狙いである。

【自己調整能力】

学習指導要領が掲げる「学力の三要素」—【知識・技能】【思考・判断・表現】【学びに向かう力】は、互いを補い合うようにつながりあう関係にある。私たちは、この三要素を循環的に結びつける軸として桃山学院大学 木村明憲先生の指導のもと「自己調整学習(Self-Regulated Learning)」の考え方を導入した。学習者が自ら目標を設定し、方略を選び、結果を省察して次の行動を決める。そのプロセスを授業の中心に据えることで、学力を“内側から育てる力”として再構築したのである。

学習計画表の導入は、その第一歩だった。学習者は単元ごと、あるいは授業の振り返りで「授業で使った方略」「詰まった箇所」「次の計画」などを記入し、授業者がコメントを返す。はじめは「集中する」「がんばる」といった曖昧な言葉が多かったが、次第に「引用を根拠に自分の意見を表現する」「資料の出典を比較する」など、行動を伴う表現へと変化していった。学習者自身が“自分にとって効果的であった取り組み方”を具体化することが、学習の自律を生んだ。

【情報活用能力】

和歌山大学教職大学院 豊田充崇先生の指導のもと、情報活用能力を横軸に据

えたことも大きな転換である。課題設定から情報収集、整理・分析、表現、振り返りまでの全過程で、出典や根拠の確認を必須とした。生成 AI の利用についても、目的と検証、引用表記を明記するルールを定め、AI を「自分の考えを磨く鏡」として扱った。学びの透明性を確保することが、思考の質を保証する条件になると考えたからである。

【学習環境の整備】

学習環境の設計では、自由進捗とステーション型支援を導入した。ミニ講義、質問カウンター、ピア相談、静寂ゾーンを併設し、生徒が自分の進捗と課題に応じて学び方を選べるようにした。教室は一見雑然としたが、その雑然さの中に学びの多様なリズムが生まれた。自由と責任を両立させる空間こそが、学びを生きたものにする。

第 3 章 教科別の授業実践から見える子どもたちの学び

— 各教科の特性を生かした情報活用の展開 —

本校での情報活用の取組は、特定の教科に偏らず、幅広い領域でおこなわれてきた。それぞれの教科は固有の目標や方法をもつが、共通する学びの構造を基盤にある。大阪府情報活用能力ステップシートの①学びスキルを各教科の「見方・考え方」に合わせて具体化した。

また「情報活用能力をはぐくむ年間計画」を作成することによって、どの教科でも「情報活用能力」を学びにむかう資質・能力として捉えた。子どもたちが「問いを立て、情報を整理し、表現し、振り返る」という循環をどの教科でも体験的にこなうことができた。本章では、各教科における具体的な実践を取り上げ、その中から浮かび上がる子どもたちの学びの姿を考察する。

社会：多面的・多角的に考える力を育む調べ学習

社会科では、資料の比較や統計の読み取りを通して、多角的に物事をとらえる力を育成している。たとえば「高度経済成長による生活の変化」の授業では、教科書に加えて映像資料やグラフを用いた。学習者は複数の情報を組み合わせながら、「生活のどの部分に変化が現れたのか」「現代との共通点や相違点は何か」といった問いを追究した。学習支援アプリを用いたカード整理によって、自分の考えを見える形にす

ることができ、他者の意見と比較することで新たな視点を得ていた。

また、支援学級では「自然災害に備える」というテーマの探究活動を行った。調べるテーマや発表の形式を複数提示し、学習者自身が選択できるようにした。情報カードには出典を記録する欄を設け、単なる検索に終わらず、誰が作った情報であるかを意識させた。このようにして社会科では、歴史や地理の学習を通して、情報を整理しながら多様な立場や視点を尊重する学びが展開されている。

数学：単元内自由進度で育てる自己調整力

数学科では、学習者の進度や理解に応じて学びを進める「単元内自由進度学習」を導入している。学習者は学習計画表であらかじめ示された単元のめあてや確認用のクエスチョンカードをもとに、自分の到達度を把握しながら学習を進める。授業では、一斉に同じ説明を聞くのではなく、必要な生徒が授業者の指導を受け、他の生徒は自分のペースで演習や探究に取り組む。

この学習形態では、学習者同士が自然に教え合う場面が多く生まれる。「この問題は〇〇さんに聞けばいい」といった相互支援のネットワークが形成され、互いに学び合う文化が育まれていた。進度の差は劣等感を生むものではなく、それぞれの学び方の個性として受けとめられている。自由進度の取組は、子どもたちが自分の学びを自己調整する実感をもつための土台となっている。

英語：生成 AI と音声ツールを活用した発信力の育成

英語科では、「伝わる英語」をめざして ICT を活用した実践を行った。たとえば「Shop ガイド」作成では、生成 AI を参考にしながら自分の表現を見直す学習を取り入れた。生成 AI が提示する例文をそのまま使うのではなく、自分の意図に合わせて修正する過程で、語彙や文法への理解が深まっていた。

音読活動では、学習アクセラレータを用いた。自分の音読を録音し、AI による発音の分析結果を確認することで、改善点が具体的に分かる。学習者は繰り返し自分の声を聞き直し、修正を重ねるうちに自信をもって英語を発話する姿へと変容していった。

さらに支援学級では、録画機能を使った発表練習をおこなった。自分の発表を録画して振り返ることで、伝え方の工夫や改善点に気づくことができ、表現することへの安心感が育っていた。英語科での ICT 活用は、発信の責任と自己評価の力を同時に育てる取組となっている。

理科：未知への問いを探究する理科学習

理科では、既習の知識を基盤としながら未知の状況を考える活動を設定している。「火星で植物を育てるには」という課題では、火星と地球の環境条件を比較しながら、必要な栽培条件を検討した。生徒はフィッシュボーン図を用いて要素を整理し、班ごとにアイデアをまとめて発表した。未知の問いに既知の知識をあてはめることで、理科の「見方・考え方」を働かせていた。

「いのち輝く Web 発信」では、調べた生物の特徴や魅力を Web サイトで発信する活動を行った。どの情報を強調し、どのようにレイアウトすれば伝わるかを工夫しながら、表現力を磨いた。また、この活動では著作権や引用のルールについても学び、発信者としての責任を意識することができた。理科における情報活用は、理科的思考と社会的発信を結びつける学びとなっている。

国語：詩や物語を深く読み、自分の表現へ

国語科では、テキストの読解を自分の表現へと発展させる取組がなされている。詩「初恋」の授業では、詩のイメージをもとに班ごとに短い物語を創作した。班を越えてチャットで意見を交換し合うことで、他者の解釈を取り入れながら物語が再構成されていった。

発表の際には、詩の描写を根拠として引用し、物語の論理性を高めることを重視した。中には画像生成 AI を用いて情景を描いた班もあり、言葉からイメージを生み出す新しい学び方が展開されていた。国語科の学習は、言葉を読むことを自己表現へとつなげ、「表現することは他者とつながることである」という理解を深めている。

各教科における実践は、それぞれ異なる目標や内容をもつが、子どもたちの学びに共通して見られるのは、情報を収集し整理する力、他者の視点を取り入れる態度、自分の表現を工夫して発信する力の育成である。情報を道具として扱うだけでなく、情報を通して自己と他者がつながる学びへと変化している点に、本校の取組の意義があると考えられる。

学びを支える空間と ICT

教室と学校図書館を組み合わせた空間設計も、本校の特徴である。静かに調べたい生徒はリサーチゾーンへ、対話を通じて考えたい学習者は協働スベ

ースへ移動できる。学びの場所を選ぶ自由が、集中と対話のバランスを整えた。ICTはその橋渡し役を果たし、WEB 会議システムやスプレッドシートにより学習ログや成果物を共有することができた。授業者のコメントが即時に返される環境は、生徒の自己調整を支えた。画面上の短いコメントのやりとりの中に、確かに「学び合う文化」が芽生えていた。

第4章 成果と課題

授業風景は目に見えて変わった。

学習者は「この方法では根拠が弱いかもしれない」「別の資料を調べてみる」と自然に言葉にするようになった。思考の可視化と共有が進み、学習の粘り強さが増した。アンケートでは「授業が楽しくなった」「自分の意見を言えるようになった」と答える学習者が増加し、思考・判断・表現問題の正答率も向上した。

教職員の変化も大きい。

情報活用能力という共通のキーワードを用いることで、教科間で生徒の成長を同じ言葉で語れるようになった。

授業研究会では「単元のはじめに教科のめあてをもっと共有した方がいいね」「〇〇さんは、学習手法に対するいい振り返りができていたね」といった対話が日常になり、端末の活用に関する助言や工夫も教科の枠を越えて共有されるようになった。

評価についての考え方も変化した。自己調整能力をはぐくむことを目的とした授業で、学習者はさまざまな学習手法を選択し、学習のペースを自ら設定する。多様な学びの姿がある分、学習者が教科としての「見方・考え方」を深められず、道に迷ってしまうことがある。単元・授業の導入で「単元のめあて」「本時のめあて」が学習者と共有される。このめあてを目印にすることで学習者は自分の目標を見失わず学びを前に進めることができる。評価が生徒を“測る”ためではなく、学びを“支える”ための道具へと変化したのである。

一方で課題も少なくない。

自由進度と協働的活動の時間設計、評価、方略指導の具体化、ICT のデータ整理など、運用面の改善が求められる。特に自己調整の初期段階では、目標の立て方や方略の例示を丁寧に教える必要がある。学びの自立は、指導の支えなしには成立しない。教師の支援が、やがて生徒の自立を生む。そのバランスを探ることが、次の課題

である。とくに「学び方」を教える初期支援の重要性が浮き彫りになった。自立は放任では育たない。丁寧な支援の上に、真の自由が生まれる。このバランスを探り続けることが、今後の課題である。

第5章 今後の展望

「頑張 Ring Active Learners」に象徴される情報活用能力を基盤とした自己調整能力をはぐくむ授業デザインは、本校の日常に広がっている。この取り組みをさらに未来へと継承・発展させていくために、時間と場所をこえる学びの構造を作らなければならない。その中心に据えたいのが「学びのクラウド化」と「STEAM 的探究の深化」である。

【学びのクラウド化】

学びのクラウド化とは、単にデジタルに学習記録を残すことにとどまらない。学習者一人ひとりの思考や探究の軌跡を学校全体の“学び”として蓄積していくことである。

学習支援アプリや WEB 会議システムに蓄えられたレポート、探究の記録、反省コメント——それらが次の学年へと受け継がれ、後輩たちが先輩の足跡を辿ることができるようになる。

過去の学びを「参考資料」としてではなく、「継承される物語」として扱うことで、学校全体の知が連なり深められていく。

たとえば、三年前に行われた SDG's のレポートを、現在の二年生が開いて読む。「この班は、こんな方法で調査したのか」「この仮説は今の私たちならどう検証できるか」と考え始める。

そこから生まれるのは、過去の学びとの対話である。先輩の思考を踏まえた新たな問いが立ち上がり、探究が継承されていく。学習者の思考や探究のプロセスが反映された学びのアーカイブを作り上げていきたい。

【STEAM 的探究の深化】

次の展望は、STEAM 教育の本格的な推進である。本校の取組をすすめるなかで、プログラミング的思考のスキルや、教科内容の横断的連携には課題が残った。

STEAM 教育は、理科や数学、技術・家庭科におけるプログラミング的思考はもちろんのこと、国語での構成的な文章表現、社会でのデータ分析、音楽や美術での創作的思考にも共通する。

プログラミング的思考とは、コードを書く力ではない。物事を分解し、順序立てて考え、他者と協働して再構築する力である。それは私たちがはぐくもうとする「頑張 Ring Active Learners」の学び方にも共通する。

今後は、この STEAM 的な視点をすべての教科に横断的に埋め込みたい。

たとえば理科の実験で得たデータをもとに、数学でモデル化を行い、社会科で政策提案に発展させる。国語ではその成果をレポートやプレゼンテーションにまとめ、英語で発信する。このような学びの往還が実現すれば、教科間の境界はゆるやかに溶け、学びが「社会とつながり、より良く変えていく力」として結実していくと考える。

STEAM 教育は、創造性と倫理を両立させる教育でもある。

AI やデータ技術を使う時代だからこそ、使う目的や影響を考え、人の心や社会へのまなざしをもって技術を扱う感性が求められる。「人権教育」や「デジタル・シティズンシップ教育」との接続も視野に入れ取り組んでいきたい。

第6章 結びにかえて

学力向上とは、外から押し上げるものではない。それは、内側から芽吹き、他者との関わりの中で成長していく力である。教師の役割は、その芽を急かさず、丁寧に支えることだと思う。生徒が「学ぶこと」に向き合うとき、教師もまた「教えること」を学び直す。この循環の中にこそ、授業改革の本質があるように思う。

「頑張 Ring Active Learners」という言葉は、生徒だけのものではない。私たち教職員自身の姿勢をも映し出している。未知の課題に挑み、互いに支え合い、失敗を学びに変え、次の一歩を考える。

【おわりに】

学びは物語である。それぞれの学習者が自分の物語を編みながら、仲間とともに新しい章を紡いでいく。授業者の役割とは、その物語を支える脚本家であり、時に観客であり、共演者でもある。

学習者の紡いだ物語は幸福な結末にむかってほしい。その願いが、私たちの「頑張 Ring Active Learners」プロジェクトの核心にある。

7. 参考文献

- 1) H・リン・エリクソン、ロイス・A・ラニング、レイチェル・フレンチ(2020.9).
『思考する教室をつくる概念型カリキュラムの理論と実践―不確実な時代を
生き抜く力―』. 北大路書房. 271p
- 2) カーラ・マーシャル、レイチェル・フレンチ(2024.5).
『思考する教室をつくる概念型探究の実践―理解の転移を促すストラテジー―』.
北大路書房. 337p
- 3) 大村はま(1973.11).『教えるということ』. 共文社. 158p
- 4) 木村明憲(2023.3).『自己調整学習 主体的な学習者を育む方法と実践』.
明治図書出版. 187p
- 5) 木村明憲(2024.3).『自己調整学習チェックリスト リストを用いた授業実践 30』.
さくら社. 158p
- 6) 木村明憲(2024.9).『自己調整方略 主体的な学びを実現する 46 の手立て』.
明治図書出版. 170p
- 7) 高橋純(2022.7).『学び続ける力と問題解決～シンキング・レンズ, シンキング・サイクル,
そして探究へ～』. 東洋館出版社. 194p
- 8) 中川一史・小林祐紀・佐藤幸江・岩崎有朋(2025.3).
『情報活用能力ベーシック活用ガイドブック』. 東洋館出版社. 187p
- 9) 難波駿(2024.2).『学び方を学ぶ授業』. 東洋館出版社. 270p
- 10) 野中陽一・豊田充崇(2023.9).
『個別最適をつくる教室環境 多様な学びを創り出す「空間」リノベーション』.
明治図書出版. 146p
- 11) 本田真大(2025.7).『援助要請の理論と支援 「助けて」と言えない心を科学する』.
金子書房. 154p
- 12) 田辺市教育委員会編(2024.3).
『GIGA スクール田辺市教育 DX の実現へ(改訂版)』リーフレット
- 13) 大阪府教育庁 市町村教育室小中学校課編(2024.3).
『大阪府情報活用能力ステップシート』リーフレット
- 14) 初等中等教育局教育課程課(2025).
「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」のためのサポートマガジン『みるみる』.
文部科学省.
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/senseiyouen/mext_00001.html,
(参照 2025-09-08)